

ヒグマとまなざし合う

—大雪高原温泉沼めぐり登山コースにおけるヒグマとの遭遇と歩行がもたらす生成変化—

米田啓祐

キーワード：身体経験、アフェクト、生成変化、ヒグマ、まなざし

要旨

本稿の目的は、「登山道を歩くということ」「ヒグマと出会うこと」という実践を身体経験としての側面から注目し、身体と環境がどのような関係を持ちうるのか、またその経験を経て、どのように身体は変化していくのかを考察することである。それにより、我々が環境の中で生きていくということ、野生動物を含む他者と出会うということはどういうことかを明らかにし、相互関係についての新たな視座を提示する。

本稿は7章の構成から成る。序章で研究目的や論文の構成をまとめた後、第一章では本稿の目的を考察するにあたり手掛かりとなる先行研究について取り上げる。第二章では調査概要を共有し、三章から五章にかけては、実際に筆者が沼めぐり登山コースで体験したことをもとに、「歩くこと」「出会うこと」「まなざすこと」の三つの観点から身体と環境の相互関係を探り、終章として本稿の考察をまとめている。

身体をもって経験すること、そしてその身体と環境が相互に影響しあうことについての研究は、これまでの人類学の中でも議論されてきた。人間の身体を構成する個体＝身体そのものは、外部の物体と相互に影響・作用しあうことによって、揺り動かされるとするスピノザ（1994）の考えは「アフェクト論」として多様な分野において広がりつつありを見せている。またドゥルーズとガタリに端を発する、自分と自分とは異なる存在、特に野生動物との関係によって情動が引き起こされ、それまで知覚しえなかったものを知覚できるようになるというような変化について述べた生成変化の議論や、インゴルドによる世界を流動性の下に捉え、我々はその世界の流れの中に絡まり合って生きるというメッシュワークの議論、ギブソンの環境には無数のアフォーダンスが備わっており、身体によってそれを知覚し、それ故に身体が異なれば対象の持つアフォーダンスも異なるとするアフォーダンス論など、身体と環境に関連する研究は人類学の中で数多く試みられている。

筆者はスタッフとしておよそ4か月間ヒグマ情報センターで働き、ほとんど毎日沼めぐり登山コースを歩き、コース内の環境と関わりながら、ヒグマを観察し、時には遭遇する

という経験をした。そうした経験を通し、前述した議論が自分の経験とつながる部分が多くあることを実感した。

コースを実際に歩くことは一見、定められた人工的な登山道を歩くという環境とは切り離された行為に思われるが、実際には道に沿って開ける環境と積極的に関わり、観察し、監視する行為であり、それゆえ瞬間的に変化していくそれらの環境と関係を結ばずにはいられない。それは人間とコースという双方向的な相互作用のみならず、それらを含む環境全てとの相互作用である。そしてこのコース特有の要素としてヒグマの存在がある。ヒグマを日常的に観察し、時には遭遇する日々を過ごし、その都度生じるヒグマとの相互関係に巻き込まれていく。ヒグマとのアフェクト、ヒグマとの遭遇によって引き起こされる生成変化を感じながらコースを歩く中で、一つの遭遇体験からヒグマの「まなざし」を強く意識するようになる。

そのような、コースを歩くうえで環境とのアフェクトの経験や、ヒグマのことを知り、ヒグマと遭遇し、まなざされ、まなざし返すという行為の中での生成変化の経験は、なによりも「この身体」をもって経験した強烈な身体経験であり、自分と環境のつながりや不可分さを強く感じる経験であった。

本稿は、自然環境を巡る諸問題が叫ばれ、日本においては野生動物との軋轢やその解決を巡り様々な問題が生じている現在、私たちという存在は確固たる境界と本質を備えた完全な実態ではなく、環境と相互にアフェクトすることによって存在しえること、「人間なるものを越えた世界」の中に私たちも生きていくと知ることの重要性を示す一助になると考える。